

渡辺美知夫先生の思い出

江口裕子

渡辺美知夫先生は昭和8年に東京帝大を御卒業後すぐに旅順工科大学の先生として赴任され、終戦後まで14年間も外地の生活をなさった。太平洋戦争をはさんでその前後、大きな動乱にさらされた満州の地にあつて直接その有為転変の歴史と共に生きられた14年間の御体験をうかがう折もなかったが、さぞかし数冊の書物にもなるほどの豊富で貴重な御経験だったろうとお察しする。

昭和32年に本学の専任教授になられたが、あの頃の女子大はまだ戦後の再建期で、英米文学科といっても日本人の先生は5、6人、今の研究館のある所に戦後急造された簡素な建物の一角に研究室とはいえ広い一室を本箱を衝立にしてし切った所に、先生も助手も本も同居して、何ごともこれからという、いわば新制大学の揺籃期だった。が先生には、女子大の俗気をはなれたのどかな雰囲気が入り、ここに安住の地盤を見いだされたのだと思う。それと同時に先生御自身の生活の建て直しも始まった。山梨大学から女子大に移られた当初は暫らく構内に住んでおられたが、間もなく深大寺の現住所に新築の家が出来上り、外人も含めた英米文学科の面々が招かれて、七夕の祭を兼ねて団欒に一夕をたのしんだが、先生にとっては意義深い出来事だったことと今にして思う。

先生は前半生を外地の波乱にみちた環境で過された故もあつてか、家庭的な平和なムードを愛する方だった。闘士型というには程遠く、生来はこまやかな情緒の持主でいらしたから、表立った所でいいことを快活磊落に言つてのけるという風ではなかった。が少人数の集まりでは一種独特の話術の妙を発揮され、それを自らもたのしむかのように、身辺雑話から、様々な体験談、人間や文学よもやま話にいたるまで雄弁に語つて聞かせられた。そんな時はやや飄逸な表情のかげに、世の中の表裏や人間のさがのしたたかさを味わいしめた苦勞人で、シニカルな観察家の一面をのぞかせられたものだった。その意味で先生は座談の人であり、人生のエッセイストでいらつちやつた。

英文学者としての先生については、卒業論文に選ばれたペーターからアーノルド、モーム、グリーンと辿ると先生の人生観の道程が窺えるような気がする。若い時は十分美の鑑賞家であつた先生が外地での深刻な体験をなさつてのちは芸術よりも生活体験の比重がはるかに重くなり、文学の中により直接的な人生批評や人間探求を、そして究極は魂の救済を求める姿勢へと転じてゆかれたのではなからうか。妄言多謝。

御退職後の現在、新設の埼玉工業大学の専任として新学期の授業におはげみのこととお察しし、先生の一層の御健勝を心から希つてやまない。